工業地の常として此の町は家も木も人も總てが黑く煤つて居て色と云ふものは少しも見出せない。新來の人には恐ろしい樣な炭坑地の光景を我々は平氣で通り過ぎて、諏訪川と云ふ可なり大きな川を渡り笹の多い土堤を川に沿ふて上る。M君が先づ三脚を据へた、續いてC先生が川中の砂原の上に畫架を立てた、少し上つてT君も描き出した、僕は川沿に土堤を四五丁も上つて漸く場所を見出した。

遠景の山は小代山であろう、川原の砂を前景として美しい綠色の松を描いた、意外に早く出來上つたので急いで土堤を下つたが三人の友は影も見ゑぬ。まだ早いのにもう歸つたのか知らんと思つて遊んで居る小供に聞いたら、とくに彼處へ行つたと云ふ。三人に殘されて淋しい氣持になつたが。私一枚の繪が出來た愉快な心持とを交る〳〵胸に浮べながら一人トボ〳〵と炭坑の町を歩いた。（十二月十八日）

衛生上から見たる水彩畫

靜岡の會友　深澤　信子

題はなか〳〵立派だが、文章は下手で意味もまるで違つて居るだろうが、之れは自分一人の意見であるから、こいつが何を言ふと思つて讀んでもらひたい、

私は靜岡市から東方へ風そ一里の片田舍に育つた者で、生れつき身體が弱くて、頭痛腹痛は常であつた。私が水彩畫に熱心したのは丁度高等を卒業してから間もない事で、それから以後と言へば春は霞たなびく河畔に櫻を寫し、又は廣く野原に咲き亂るゝ菜種を寫生し、夏に至れば休暇を利用して、海岸に遊び、秋は紅ゐ匂ふ深山に行き冬來れば雪を樂しみ、實に一年を面白く過す。

或る時家人自分に向つて『お前は一昨年頃迄毎日毎日頭が痛いとか腹が痛いとか言つて居たのに、此の頃は大いさう身體が丈夫になつたなアー。』と言はれた。

之れを聞いて、私しは初めて此の水彩畫の價値を知つた。思へば實に高等卒業以來此の方病氣にかかつた事がない。私の身體のこの樣になつたのも皆この水彩畫の爲め——あまり嬉しい餘りに——。

春鳥會新會友

秋田縣大曲町　榊田モト子
長野市西後町　山田英二

日本水彩畫會新會友

福岡縣飯塚町宮ノ下　花村直助
秋田縣大曲町　榊田モト子
沖繩縣師範學校　石垣孫保
宮崎縣東臼杵郡西郷村田代尋常高等小學校　田原安市
松江市松江分新町　杉本綠